

〈機械〉をモンタージュ（組み立て） しなおす——スピノザ・ホッブズ・ヘーヒ

樽 沼 範 久

1. 「人間の隷属」とその彼岸

「われわれは身体をなしうることさえも知らない、とスピノザは言う。すなわち、われわれは自分たちがいかなる変様をうけいれることができるのかということさえ知らないし、またわれわれの力がどこまで達するかも知らないのである。」⁽¹⁾

よく引かれる部分である。ドゥルーズは『ニーチェと哲学』（1962）でも『スピノザ——実践の哲学』（1981）でも、スピノザのこの言明をくりかえし導入してきた⁽²⁾。「身体が何をなしうるかをこれまでまだ誰も規定しなかった」⁽³⁾。「身体が何をなしうるかまた身体の本性の単なる考察だけから何が導き出されるかを全然知らないのである」⁽⁴⁾。しかし、あらためて問わなければならない。なぜわれわれはそれを知らないのか。「今日まで、誰も身体の機能のすべてを説明しうるほど正確には身体の組織を知らなかった」⁽⁵⁾からだろうか。それだけだろうか。

ここでドゥルーズが参照するスピノザ『エチカ 幾何学的秩序によって論証された』（1677）第三部「感情の起源および本性について」の定理二備考は、身体と精神の関係をめぐる考察である。備考が付された定理二には、こうある。「身体が精神を思惟するように決定することはできないし、また精神が身体を運動ないし静止に、あるいは他のあること（もしそうしたものがあるならば）をするように決定することもできない。」⁽⁶⁾

身体が精神のすることを決定できないこと、そして、精神が身体のすることを決定できないこと。その意味で身体と精神は互いに自律していること。身体は精神に従属しているわけでも、精神は身体に従属しているわけでもないこと。どち

らが優位というわけでもないこと、同位であること。

この自律性、同位性が崩れたとき、人間は身体の変様力（変容をうけいれる力能、変容をおこなう力能）、活動力（運動や静止などの力能）から切り離される。あるいは、人間は精神の変様力、活動力から切り離される。スピノザ『エチカ』第四部「人間の隷属あるいは感情の力について」の言葉を用いれば、「人間の隷属」がもたらされる。身体に焦点を当てれば、「精神が身体を運動ないし静止に、あるいは他のあること（もしそうしたものがあつたらば）をできるように決定する」配置に入れられてしまう。そして、身体が「いかなる変様をうけいれることができるのかということさえ知らないし」、身体の力が「どこまで達するかも知らない」。身体は精神に決定される、従属すると意識されてしまう。身体が精神に従属するというよりも、この配置に身体が従属してしまう。結果、「われわれは身体になしうることさえも知らない」。

この「人間の隷属」をドゥルーズは、そしてスピノザは、ここで政治／統治の問題あるいは社会的関係の問題としては論じていない。少なくともこの文脈では、身体と精神の平行論だけが問題になっている。しかし『エチカ』第三部定理二備考は上記のように、身体と精神の関係の政治的問題でもある。身体と精神のどちらが優位というわけでもなく、同位であること。精神が身体のことを決定できないこと。その意味で身体と精神は互いに自律していること。身体は精神に従属しているわけでも、精神は身体に従属しているわけでもないこと。

この従属、隷属をほどこならば、「われわれは身体になしうること」を知る。精神になしうることも知る。そのときわれわれは、「いかなる変様をうけいれることができる」ことになるか。いかなる変様をおこなうことができることになるか。いかなる活動をすることができることになるか。「われわれの力がどこまで達するか」。

にもかかわらず「人間の隷属」はなぜ生じるのか。この局面でこそスピノザ（1632-77）をホップズ（1588-1679）と並べる必要がある。問いを絞れば、スピノザ『エチカ』第三部定理二と備考を、ホップズ『リヴァイアサン、すなわち教会及び市民のコモンウェルスの物質、形態、力』（1651）、とりわけその有名な図像

へと差し向けることである。

なぜ「われわれは身体のなしうることさえも知らない」のか。なぜ「われわれは自分たちがいかなる変様をうけいれることができるのか」ということさえ知らないし、またわれわれの力がどこまで達するかも知らない」のか。それは「今日まで、誰も身体の機能のすべてを説明しうるほど正確には身体の組織を知らなかつた」からにとどまらず、われわれが「リヴァイアサン」に吸収されているからではないか。身体の変様力（変容をうけいれる力能、変容をおこなう力能）や活動力（運動や静止などの力能）も、精神の変様力や活動力も、「リヴァイアサン」の巨大な「人工的人間」「自動機械 Automata」⁽⁷⁾に統合され、そこから配分を受ける配置に入ってしまったからではないか。

2. リヴァイアサンのモンタージュ（組み立て）にハサミを入れる

ホップズ『リヴァイアサン』の「序説」の冒頭部分を引こう。工場で人工的に製造した多数の人体（= ロボット）が登場するカレル・チャペックの戯曲『ロボット (RUR)』(1920)に記入されていても不思議ではないヴィジョンがここにある。チャペックの描くロボットたち、「人造人間」⁽⁸⁾は、「化学合成」によって製造された「生きた物質のような反応をする物質」⁽⁹⁾を、「肝臓」「脳」「骨」「神経」「腺」「消化器」などに組織化し、それらを「組立工場」で「組み合わせる」⁽¹⁰⁾「生きた機械」⁽¹¹⁾である。それに類してホップズは、多数の生きた人間をいわば「組立工場」で「組み合わせる」ことで、『リヴァイアサン』の図像のように、巨大な「人工的人間」「自動機械」としての「コモン・ウェルスあるいはステート国家」を組み立てるのだ。これらの工程は、1910年代から20年代のダダイストたちが使用した産業用語を使用するなら、「モンタージュ（組み立て）」⁽¹²⁾と表現することもできるだろう。

自然（神がそれによってこの世界をつくったし、それによってこの世界を統治している、その技術は、人間の技術によって、他のおおくのものごとにおいてのように、人工的動物をつくりうるということにおいても、模倣される。す

なわち、生命は四肢の運動にほかならず、その運動のはじまりが、内部の主要な部分にある、ということを見れば、すべての自動機械 *Automata*（時計がそうするように発条と車でみずから動く機関）が、人工の生命をもっていると、われわれがいつてはいけないわけがあるか。心臓は何かといえ、ひとつの発条にほかならず、神経はといえば、それだけの数の紐にほかならず、そして自動関節は、それだけの数の車にほかならず、これらが全身体に、製作者 *Artificer* によって意図されたとおりの運動を、与えるのではないだろうか。技術はさらにすすんで、自然の理性的でもっともすぐれた作品である、人間を模倣する。すなわち、技術によって、コモン・ウェルスあるいは国家（ラテン語ではキウィタス）とよばれる、あの偉大なりヴァイアサンが、創造されるのであり、それは人工の人間にほかならない。ただしそれは、自然人よりも形がおおきくて力がつよいのであって、自然人をそれが保護し防衛するようにと、意図されている。そして、そのなかで、主権 *Sovereignty* は全身体に生命と運動を与えるのだから、人工の魂であって、為政者たち *Magistrates* とその他の司法と行政の役人たちは、人工の関節である。賞罰（それによって主権の地位にむすびつけられて、それぞれの関節と四肢は、自己の義務を遂行するために動かされる）は、神経であって、自然の身体においてと、おなじことをする。すべての個々の構成員の富と財産は、力であり、人民福祉 *Salus Populi*（人民の安全）は、その業務であり、それが知る必要のあるすべてのことを、それに対して提示する顧問官たちは、記憶であり、公正 *Equity* と諸法律は、人工の理性と意志であり、和合は健康、騒乱は病気で、内戦は死である。さいごに、この政治体の諸部分を、はじめてつくり、あつめ、結合した協定 *Pacts* と信約 *Covenants* は、創造において神が宣告したあの命令 *Fiat* すなわち人間をつくらうということばに、似ている。⁽¹³⁾

ホブズ（1588-1679）が『リヴァイアサン』（1651）以後に書いて死後に公刊された『ビヒモス』（1682）の副題「1640年から1660年にわたるイングランド内戦の原因、及び内戦遂行の意図並びに策略にかんする歴史」が告げるように、『リ

〈機械〉をモンタージュ（組み立て）しなおす——スピノザ・ホップズ・ヘーヒ 樽沼 範久
ヴァイアサン』のなした巨大な「人工の人間」「自動機械」の組み立て（モンタージュ）は、渦中の「内戦」を理論的、原理的に終わらせることに賭けられている。この課題の切実さは想像するにあまりある。「保護」と「防衛」を交換条件にした、「和合は健康、騒乱は病気で、内戦は死である」の畳みかけは迫力がある。カール・シュミットの言葉を借りれば、「リヴァイアサンが、人間の精神も感情も支配してしまっている（…）。これがリヴァイアサンの支配のもつ実に驚嘆すべき力なのである」⁽¹⁴⁾。

しかし間違えてはならないのだが、ホップズは嬉々として「リヴァイアサン」の組み立て（モンタージュ）を言祝いでいるのではない。『リヴァイアサン』を結ぶ「総括と結論」の最後の部分は、ホップズの真意を滲ませているのではないか。「わたくしは、自然の物体についての、中絶されていたわたくしの思索にかえるのであって、そのなかで（もし神がわたくしにそれを終了する健康を与えるならば）、あたらしさが、この人工的身体についての学説においてはしばしば腹だちを与えるのおなじだけ、おおくのよろこびを与えることを、わたくしは希望する。というのは、どんな人の利益にもよろこびにも反しないような真理は、すべての人に歓迎されるものだからである。」⁽¹⁵⁾

つまりは、「リヴァイアサン」のこの組み立て（モンタージュ）にホップズ自身、「よろこび」ではなく「腹だち」を覚えていたということだ。そして読者にも「おおくのよろこびを与える」のではなく「腹だちを与える」だろうということも想定していた。そして「人工的身体」が思索すべきことのすべてではないこと、「自然の物体」（自然的身体）の思索から「あたらしさ」を引き出せることを期していた。それに対してスピノザは、「リヴァイアサン」の組み立て（モンタージュ）にいわばハサミを入れて、人間の配置をやりなおそうとしたのではないだろうか。

ベルリン・ダダの一員だったハンナ・ヘーヒのフォトモンタージュ《ダダ包丁でドイツの最近のワイマール・ビール腹文化時代を切り刻む》(1919/20)を模して言えば、大勢の「自然人」をたっぷりと巨大な胴体や両腕に飲みこんだ「リヴァイアサン」を、スピノザは「包丁」で「切り刻む」。と同時に、香川檀が「ヘーヒのダダ期のフォトモンタージュの特徴」を、「対立する要素を並置するハウス

マンのものとも、断片を混沌状態に散乱させるグロスやハートフィールドのものとも、まったく異なる「動態性」として見出したように、スピノザは「動態性」——変様力（変容をうけいれる力能、変容をおこなう力能）や活動力（運動や静止などの力能）——のなかに人間を置いていく。「リヴァイアサン」のたんなる「解体」⁽¹⁶⁾によって「内戦」「騒乱」にわれわれを引きもどすのではなく、そうかと言って、「内戦」「騒乱」と対立する「和合」を組み立てなおすのでもなく。「あたりさし」も「よろこび」も引き出させない「命令」に隷属した「人間をつくらう」という「ことば」ならば、こうした「命令」は「切り刻もう」。そうでない人間をつくりなおそう。

『エチカ』第三部定理二（「身体が精神を思惟するように決定することはできないし、また精神が身体を運動ないし静止に、あるいは他のあること（もしそうしたものがあれば）をするように決定することもできない」）にしても、こうしたハサミのひとつだ⁽¹⁷⁾。引用した『リヴァイアサン』「序説」に見られる以下の言葉は、定理二によって切断されるだろう。「全身体に、製作者 Artificer によって意図されたとおりの運動を、与えるのではないだろうか」。「人工の魂」である「主権 Sovereignty は全身体に生命と運動を与える」。そうではなく、それが人だろうと神だろうと、製作者の意図に決定されない運動を全身体はなしうる。そして、人工の物体（人工的身体）であれ自然の物体（自然的身体）であれ、切断されるべき線はこの人工と自然の違いにあるのでもない。それが人工だろうと自然だろうと「魂」に決定することもできない、そうした生命と運動が全身体に与えられうる、ということが重要である。だからこそ、「身体が何をなしうるかをこれまでまだ誰も規定しなかった」、「身体が何をなしうるかまた身体の本性の単なる考察だけから何が導き出されるかを全然知らないのである」（定理二備考）。

3. モンタージュ（組み立て）の方向転換

巨大な「人工の人間」「自動機械」としての「コモン-ウェルスあるいは国家」^{ステート}の組み立て（モンタージュ）は、それにしても異様な「技術」だった。「人間をつくらう」という「命令」は奇妙な「ことば」だった。ホブズ自身の指示によっ

〈機械〉をモニタージュ（組み立て）しなおす——スピノザ・ホップズ・ヘーヒ 樽沼 範久

で描かせたという『リヴァイアサン』の有名な図像は、それをあらわにしている⁽¹⁸⁾。あたかもこの「技術」と「命令」の異様さ、奇妙さを知らせる「組み立て（モニタージュ）」を、ホップズ自身が指示して残したかのように。

「リヴァイアサン」の体内がどうなっているかは不可視だが、その胴体と両腕の表皮の細胞のように（あるいは柔らかい甲冑か防衛用のボディスーツの紋様のように）、多数の人間たちがひしめきあって合体した巨大な「人工的人間」「自動機械」。この「リヴァイアサン」はどこに棲んでいるのだろうか。どこで生きているのだろうか。リヴァイアサンは海の怪物であり、その半身は図像に描かれた山のむこうの海に浸されているのだろうか。そして海から身を起こして、大地を外部から、そして上部から統治するべく、その上半身を大地の中空に屹立させているのだろうか。右手に剣を、左手に司教杖を握り、われわれを正面から見据える無表情な顔面を向けて。

かたや統合された多数の人間たちは、「全身体に生命と運動を与える」「人工の魂」のほうを向いているのか、こちらに目を向けることもない。羊皮紙に手書きされた写しでは、手前のほうに顔を向けた多数の人頭がごろごろと密集して描かれているようだが⁽¹⁹⁾、『リヴァイアサン』に掲げられた図版では、鼻や耳や手や足などの感覚器官、運動器官があるようにも見えない。「主権」が「全身体に生命と運動を与える」のであるというのだから、「リヴァイアサン」に合体した多数の人間にとって、これらの器官は無用とされるのだろうか。運動器官、感覚器官は巨大な「人工的人間」「自動機械」に独占されている。

では、前景に描かれた都市は何なのだろうか。「リヴァイアサン」に統合された多数の人間たちは、この都市で生活をしていただけではないのか。都市を見ればそこに人影はほとんど見あたらない。この都市には「騒乱」も「内戦」もなく、だからといって「和合」もない。この点を強調するアガンベンを引こう。

いずれにせよ決定的なのは——大地と海の対置を超えた先で——、「可死的な神」「人工的人間に他ならない、^{コモン・ウェルス}公共体もしくは国家と呼ばれるもの」（ホップズは序で、リヴァイアサンをこのように定義している）が、都市のなかには

なく都市の外に住まっているという驚くべき事実である。リヴァイアサンの場合は都市の壁の外であるのみならず、その領土の外でもある。それは無主地ないし海のなか——いずれにせよ都市のなかではないところ——である。^{コモン・ウェルス}公共体、^{ゴディ・ポリティカル}政治体は都市の物理的身体とは一致しない。この変則的状况をこそ私たちはこれから理解しようとすべきなのである。(…)二人の人物像を除けば、都市が完璧に住民を欠いているということである。街路は完璧に空虚であり、都市には誰も住んでおらず、そこには誰も生きていない。⁽²⁰⁾

そう誰も。「リヴァイアサン」ですら、この都市に住んでいるようには見えない。そこで生きているようには見えない。都市からも、地上にある多種多様な物たちからも、生き物たちからも切り離されている。そして「リヴァイアサン」の人工的身体、正確に言えば人工的な胴体と両腕は、類似した人体(のようなもの)しかない過密な集合体になっている。なにかしらの物が、別種の生き物が場所をもつことができる空隙さえ、互いの間に見えない。

スピノザ『エチカ』第三部定理一五をさしはさめば、「おのおの物は偶然によって喜び・悲しみあるいは欲望の原因となりうる」⁽²¹⁾のだが、感情や欲望を生み出す「原因」になりうるような「おのおの物」は、前景の都市に、都市をふくむ地上の世界に、置いてきてしまったかのようだ。この状況では多数の間人も「リヴァイアサン」も、身体が「いかなる変様をうけいれることができるのかということさえ知らないし」、身体の力が「どこまで達するかも知らない」。それぞれの「人間の隷属」、そして巨大な「人工人間」「自動機械」の「隷属」に帰結する。

アガンベン論じていないが、あるいはこう考えることもできる。都市はもはや「リヴァイアサン」に移植されたのだと。それでもそれを「都市」と呼び続けるならば。論文「レヴィアタン——その意義と挫折——」(1938)や『陸と海——世界史的な考察』(1942)のシュミットと同時期、世界史の同じ局面で、下村寅太郎はこの事態を鋭敏につかまえていた。「自然人間あるいは人間の人間は消失する一。人間はもはや自然の裡にあるものでなく、自然は人下の外なる環境や人間を育成する地盤でなく、個性や形態をもたない素材であり、質料であり、再

〈機械〉をモンタージュ（組み立て）しなおす——スピノザ・ホップズ・ヘーヒ 樽沼 範久
創造されてよってよって「機械」を形成し、その総合的組織としての「近代都市」を構成する如きものである」⁽²²⁾。「何よりもまず「土地」から——自然的自然から離れることにおいて成立する」段階⁽²³⁾。そして、われわれ「機械を装備した人間、機械化された人間」は、「近代都市」を構成するような「巨大にしてかつ精緻な機械」を、「自己の器官とする如き Organism」なのだ⁽²⁴⁾。

しかしながら下村も認めるように、「人間」は「巨大にしてかつ精緻な機械」をどのように「自己の器官」にすることができるかを知らない。座談会「近代の超克」（1942）に出席した下村は、この「新しい身体を支配することが出来ない」こと、その巨大な機械としての人工的身体に「追従し得ない所に」「近代の悲劇」があるとも語っていた。「近代の超克」は下村にとって、この「巨大なスケールの問題」を見すえることからしか始まらなかった⁽²⁵⁾。

われわれはこの「巨大なスケールの問題」に、モンタージュ（組み立て）をもって臨むのがひとつの方法であるように思われる。「リヴァイアサン」（および「リヴァイアサン」に移植された「近代都市」）を構成するモンタージュ（組み立て）に対して、別のモンタージュ（組み立て）を差し向けるのだ。

たとえば「リヴァイアサン」を大地（あるいは大地に含まれた都市）に折り曲げる。天空からのしかかる「リヴァイアサン」を横たわせる。垂直性から水平性、階層性から同位性への方向転換。ガリバーの身体のように、あるいはマックス・エルンスト《花嫁としての解剖体》（1921）のように。しかし解剖体となるのは、「両翼もがれエンジンも取り外された、それじたい戦闘機の亡骸^{なきがら}」を「棺あるいは解剖台」として「横たえられている」「女ロボット」⁽²⁶⁾ではなく「リヴァイアサン」だ。

この「リヴァイアサン」の身体には無数の人間身体（のようなもの）だけでなく、そして彼の胴体や両腕のみならず、その顔にも手にも髪の毛にも、人間をふくむ生き物たちが地衣類のように付着していく。そして、フリーダ・カーロの絵画《根》（1943）のような植物の茎や葉が、大地やそこに含まれる都市に横たわる「リヴァイアサン」の身体を穿ち、葉からは毛細血管のような細い根が大地へと無数の通路を広げていくことだろう。

あるいは、多種多様な物も生き物の身体も隣り合わせて、貼り合わせて、もっと巨大な、しかし同時に小さいものたちの集合でもあるものをモンタージュ（組み立て）する。オオカミとしての人間だけでなく。羊としての人間だけでなく。「偶然によって喜び・悲しみあるいは欲望の原因となりうる」大小の「おのおのの物」たち（『エチカ』第三部定理一五）、大小の生き物たちを合流させる。サミュエル・バトラー『エレホン（Erewhon or Over the Range）』（1872）の「機械の書」が描出したような、異種が混交して変異する機械。人間も機械も花も昆虫もモンタージュ（組み立て）に入ってきて、「親とは似ても似つかない子が生まれる生殖システム」⁽²⁷⁾。ヘーヒの数ある作品のなかから水彩画《合一》（1922）を選び出してもいい。この水彩画では、香川の言葉を借りれば、「ボルトやプロペラや、ショバルカーのショバルでできた機械仕掛けの植物が描かれ、〈雄花〉が〈雌花〉のなかに触手をのばし性的合一をとげている。生物の生殖行為のプロセスを機械が模倣している図であり、人間-自然界-機械という三つの位相にまたがる性を表現している」⁽²⁸⁾。「機械と性愛といういかにもダダの関心事であるテーマを扱ったこの絵画では、機械部品でつくられた雄と雌の花が、昆虫による受粉のように交尾・合体している」⁽²⁹⁾。

頭や手も多数の身体が入り出可能で、大地も都市も「リヴァイアサン」も海洋も天空も充満させることが可能ならば、それがどれだけ変容することができるか、どこまで達することができるか。「リヴァイアサン」の巨大身体に入ってきている身体たちが、それぞれの両手に何かを持ちえたら、それぞれの目や鼻や耳や口を備えていたら、あるいはその身体たちが人間身体だけでなく、多種の身体が入りえたとしたら、どこまで達することができるだろうか。「皆、ロボットに戦争を教えたのは、古いヨーロッパの罪だ！ ったく、あの政治は止められないのか？ 動いている労働力を兵隊にするのは罪だ！」⁽³⁰⁾

「ダダ期に限らず、ヘーヒの仕事全体を考えるうえで示唆的」と香川が引く、「自然と人類との共演〔共同遊戯〕」というベンヤミンの現代機械技術論⁽³¹⁾、あるいはヘーヒ自身の言葉はこの局面でこそ回帰して鳴り響くはずだ。「わたしは、わたしたち人間が手に入れるすべてのものの周りに引いてしまいがちな、きっちり

〈機械〉をモンタージュ（組み立て）しなおす——スピノザ・ホッブズ・ヘーヒ 樽沼 範久
した境界線をかき消したいのです。……わたしが示したいのは、小さなものも大きいし、大きなものも小さいのだということ」⁽³²⁾。

注

- (1) ジル・ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』[1968]、工藤喜作 / 小柴康子 / 小谷晴勇訳、法政大学出版局、1991年、231頁。
- (2) ジル・ドゥルーズ『ニーチェと哲学』[1962]、江川隆男訳、河出文庫、2008年、88頁；ジル・ドゥルーズ『スピノザ——実践の哲学』[1981]、鈴木雅大訳、平凡社ライブラリー、2002年、33頁。
- (3) スピノザ『エチカ』(上)、畠中尚志訳、岩波文庫、1951年、171頁。
- (4) 同前、172頁。
- (5) 同前、171頁。
- (6) 同前、169-170頁。
- (7) ホッブズ『リヴァイアサン』(一)、水田洋訳、岩波文庫、1954年、37頁。
- (8) カレル・チャペック『ロボット RUR』[1920]、阿部賢一訳、中公文庫、2020年、16頁。
- (9) 同前、19頁。
- (10) 同前、34-35頁。
- (11) 同前、51頁。
- (12) 香川檀『ハンナ・ヘーヒ 透視のイメージ遊戯』、水声社、2019年、60頁。
- (13) ホッブズ『リヴァイアサン』、前掲書、37-38頁。「内乱」(civil war)は「内戦」と訳語を変えて引用した。
- (14) カール・シュミット『陸と海——世界史的な考察』[1942]、中山元訳、日経BP社、2018年、214頁。
- (15) ホッブズ『リヴァイアサン』(四)、水田洋訳、岩波文庫、1985年、173頁。「人工的な物体」(artificial body)は「人工的身体」と訳語を変えて引用した。アガンベンはこの部分を引きながら、「王のなかへと統一」しきれないはずの「自然的身体マルチチユードの群がり」に読者の注意を促している。ジョルジョ・アガ

ンベン『スタシス 政治的パラダイムとしての内戦』〔2015〕、高桑和巳訳、青土社、2016年、第二章「リヴァイアサンとビヒモス」、80頁。

- (16) ホップズ『リヴァイアサン』(一)、前掲書、38頁。
- (17) カール・シュミットは「リヴァイアサン」の致命的な「破れ目」を『神学・政治学論』のスピノザが突いたと論じている。その「破れ目」は、ホップズが「外的礼拜」と「内的信仰」を区別して、後者を「リヴァイアサン」の規制外に置いた「留保」だという。この「破れ目」も身体と精神の平行論に関わるが、シュミットはスピノザの原理を「個人の思想の自由」に限定してしまっている。カール・シュミット「レヴィアタン——その意義と挫折——」〔1938〕、長尾龍一訳、『カール・シュミット著作集II』、長尾龍一編、慈学社出版、2007年、74-75頁。
- (18) アガンベン前掲書のほか、田中純「レヴィアタン解剖 イメージ・表象・身体」(白井隆一郎編『カール・シュミットと現代』、沖積舎、2005年；『政治の美学』、東京大学出版会、2008年所収)が、主要先行研究への批判的読解を含めて参考になる。
- (19) 田中、前掲論文、『カール・シュミットと現代』48頁；『政治の美学』189頁。アガンベン、前掲書、61-63頁。左手に司教杖ではなく天秤を持っているほか、「胴体の部分では老若男女入り乱れて、市井の情景が描かれているように見える」『リヴァイアサン』フランス語版(1652)扉絵の図版は、ホルスト・ブレーデンカンプによる先行研究を参照しながら、田中、前掲論文に掲載されている。
- (20) アガンベン、前掲書、70-71頁。
- (21) スピノザ、前掲書、184頁。
- (22) 下村寅太郎「現代における人間の概念——自然における人間の地位」〔1940〕、『科学史の哲学』〔1941〕所収、『下村寅太郎著作集1 数理哲学・科学史の哲学』、みすず書房、1988年、321頁。
- (23) 同前、323頁。
- (24) 同前、324頁。

〈機械〉をモンタージュ（組み立て）しなおす——スピノザ・ホップズ・ヘーヒ 樽沼 範久

- (25) 西谷啓治、菊池正士、小林秀雄、三好達治、諸井三郎、下村寅太郎、亀井勝一郎、津村秀夫、河上徹太郎、鈴木成高、吉満義彦、林房雄、中村光夫／竹内好『近代の超克』、富山房百科文庫、1979年、262頁。
- (26) 香川檀『ダダの性と身体 エルンスト・グロス・ヘーヒ』、ブリュッケ、1998年、89-92頁。
- (27) サミュエル・バトラー『エレホン』〔1872〕、武藤浩史訳、新潮社、2020年、238頁。
- (28) 香川『ダダの性と身体』、前掲書、283頁。
- (29) 香川『ハンナ・ヘーヒ』、前掲書、126頁。
- (30) チャベック『ロボット RUR』、前掲書、124頁。
- (31) 香川『ハンナ・ヘーヒ』、前掲書、264-265頁。ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品〔第二稿〕」〔1936〕、久保哲司訳、浅井健二郎編訳、『ベンヤミン・コレクション1 近代の意味』、ちくま学芸文庫、1995年、598頁。「自然と人類との共演〔共同遊戯〕」に関しては、ヘーヒが「終^{つひ}の住処」で「心血を注いだ」、「どこかコラージュの作業に似ていた」「造園」「庭造り」（香川『ハンナ・ヘーヒ』、前掲書、192-195頁）も見すごすことはできない。
- (32) 同前、177頁に引用。

